埼玉新聞
2023年（令和5年）11月3日 金曜日

知・技の創造 ものつくり大学発 ▷96◁

# 地域活性 子どもたちから

田尻 要 建設学科教授

**■地域を担うのは誰？**

郊外や地方で人口が減少する中で、地域の活力やにぎわいを維持するためには、少ない人口でも生産性を上げる新たな産業の創出や観光の振興などが考えられますが、そこに住まう「人」が必要不可欠です。そのため、いずれの地域も「人」を確保するために、移住・定住の促進や、地域外に居住されていても地域と関わりを持ってもらえる関係人口を増やすことに力を入れています。このように人口の減少局面では「地域の外の人」に目が行きがちですが、もっと身近なところに頼もしいヒューマンリソースがありません。

**■地域の子どもたち**

地域の子どもたちは、私立学校を除けば、お互いに同じ地域の中で同じ小学校や中学校に通学することが多く、比較的近隣に居住して親密な人間関係の基礎を築いていく傾向にあります。しかしながら高校生や大学生になると、地域外への通学や活動の場面も多くなり、そのまま就職することでネットワークは広がりますが、地域への関わりは少なくなる傾向にあります。ここで、子どもたちによって組織されたネットワークの過程で広がるネットワークの中に、中でも地域に根差した生活を送る小学生・中学生の小学校と中学校をまたいだ地域の課題を解決してもらう当事者の一員になってもらうことです。もちろん、子どもたちだけでは難しい場面も多いと思われますので、大学をはじめ有志のオトナも適切なサポートを行います。組織の中には複数のチームがあり、学年単位といった横割りではなく小学生・中学生の区別なく学年も超えた混成チームを編成し、自分たちで決めたテーマに取り組んだり、ほかのチームと協力することで年齢の枠を超えたつながりをつくります。このチームは学年が上がっても、卒業しても、地域を離れても可能な限り維持に努めます。成果は議会などに提言や報告することも考えられます。

**■緩やかでも強力な応援団**

このようなネットワークの中の組織から、たとえ数名でも地域に残って活躍したり、Uターンしたり、地域に居住していなくても興味を持ち続けて外からの力でまちづくりや地域課題の解決を支援したり、または地域に縁がなかった人までも巻き込むきっかけになれば、緩やかではありますが強力な応援団として、結局は中長期的に見ると大きな効果を発揮するのではないかと考えます。地域の活性化には中核となる人材の存在がキモですので、その人材と地域にかかわるネットワークを、今の子どもたちの中から「育てていく」仕組みづくりも重要ではないでしょうか。

**■地域への関わりを維持**

私たちの研究室では、地域時期に、もっと積極的に地域のまちづくりや課題解決への意識や行動につながる組織をつくることができれば、中長期的な人材確保につながるのではないかと考えています。

**■地域への関わりを維持**

私たちの研究室では、地域学校の子どもたちにまちづくりや地域の課題を解決してもらうことで、子どもたちによって組織された「子どもまちづくり協議会」の試験的な設置を提唱しており、ある自治体において実際に取り組みを始めています。現はあくまで組織の趣旨や活動を理解してもらうための仮称で、覚えやすく親しみやすい名称をみんなで考えればよいと考えています。この組織の大きな目的は、小学校・中

たじり・かなめ 九州大学 博士（工学）。総合建設会社を経て国立群馬工業高等専門学校助教授、ものつくり大学准教授、2013年より現職。自治体との連携実績や委員も多数。